地球生命の
不思議な
迷宮

ファーブルが観た夢

森 昭彦 著

SoftBank Creative

■ 著者略歴

森 昭彦（もり あきひこ）

1969年生まれ。サイエンス・ジャーナリスト。ガーデナー。自然写真家。おもに関東圏を活動拠点に植物と動物のユニークな相関性について実地調査・研究・執筆を手がける。著書にサイエンス・アイ新書『身近なムシのびっくり新常識100』『身近な雑草のふしぎ』『身近な野の花のふしぎ』がある。

ファーブルが観(み)た夢(ゆめ)

地球生命(ちきゅうせいめい)の不思議(ふしぎ)な迷宮(めいきゅう)

2010年8月24日　初版第1刷発行

著　　者　森(もり) 昭彦(あきひこ)
発 行 者　新田光敏
発 行 所　ソフトバンク クリエイティブ株式会社
〒107-0052　東京都港区赤坂4-13-13
編集：科学書籍編集部
03(5549)1138
営業：03(5549)1201
装丁・組版　クニメディア株式会社
印刷・製本　図書印刷株式会社

乱丁・落丁本が万が一ございましたら、小社営業部まで着払いにてご送付ください。送料小社負担にてお取り替えいたします。本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写（コピー）することは、かたくお断りいたします。

©森 昭彦　2010　Printed in Japan

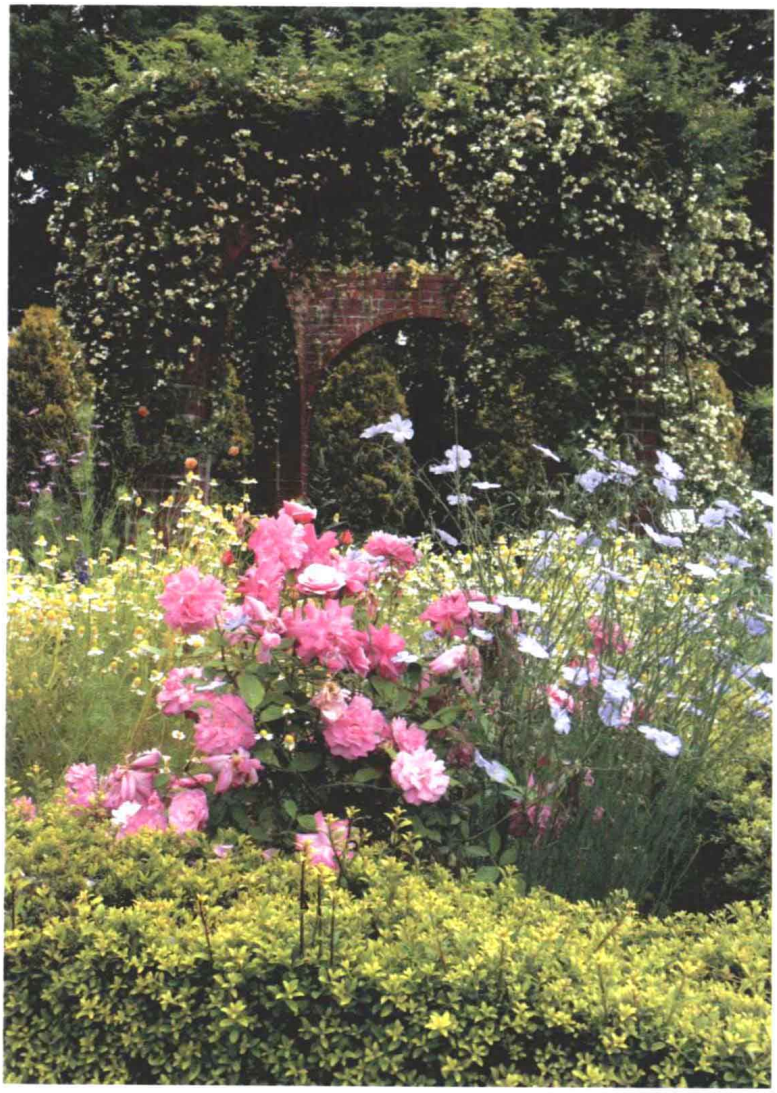
ISBN 978-4-7973-4994-8

地球生命の不思議な迷宮

ファーブルが観た夢

森 昭彦 著

なんと聡明なことであろうか。
あのちいさな連中は、
おいしいものがどこにあるか、知っている。
必要なものは、見つけてくる。
それでもなければ、自分でつくる。
「欲しいものは、すべて、すぐそこにある」
生きるを楽しむ英知は、身近な自然にこそ、息づいている。

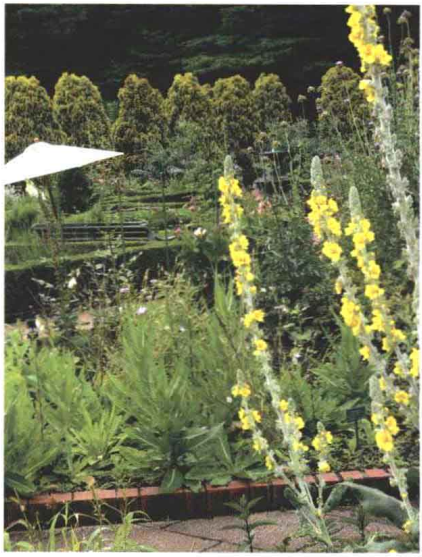


筆者が調査・研究をしている有機栽培のハーブ・ガーデン

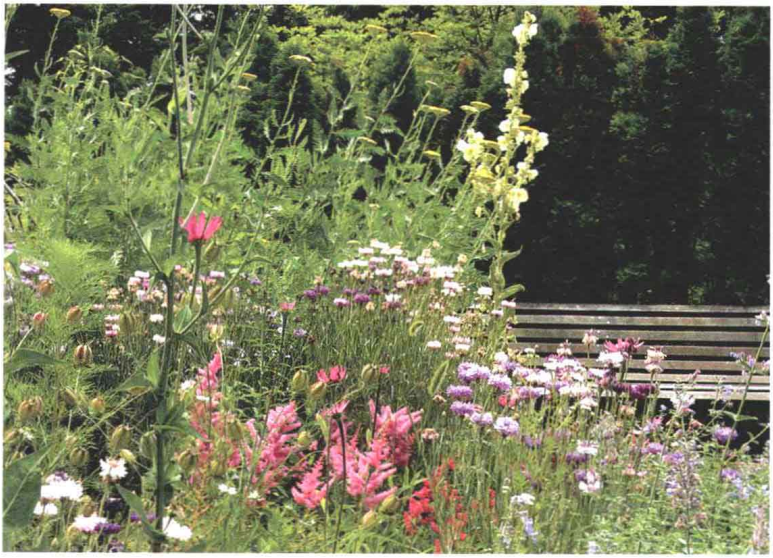
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

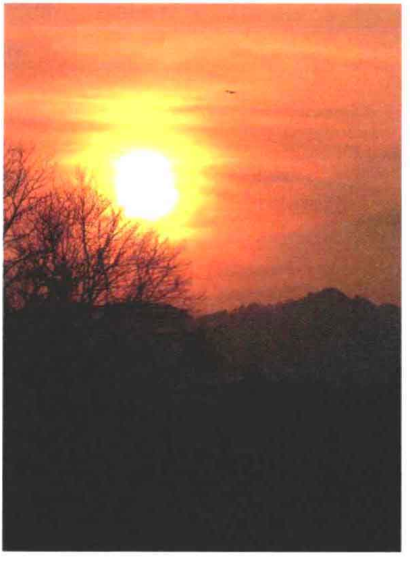
いつだって完璧を求められるジガバチは、アリスにでてくる神経質な白ウサギにほかならず、すぐそばに潜んでいる不思議の国へと導いてくれる

——第一章　本能の美しき迷宮



ジガバチが特に好んで活動するエリア

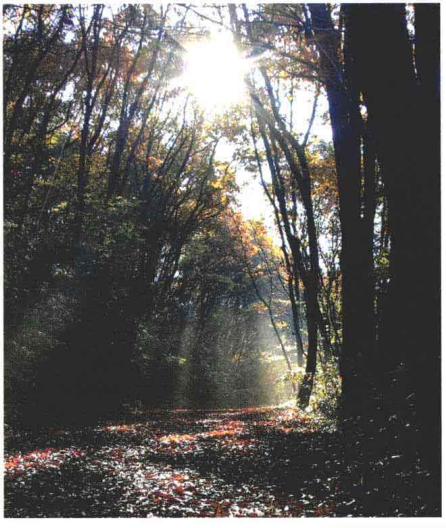




筆者の研究フィールド。子どものころからの遊び場には、現在も美しい営みが息づいている

いつもは通りすぎるだけの雑木林。そこには奥底もしれぬ、不思議な世界がきらめいている

——第二章　夏の夜のシルクロード



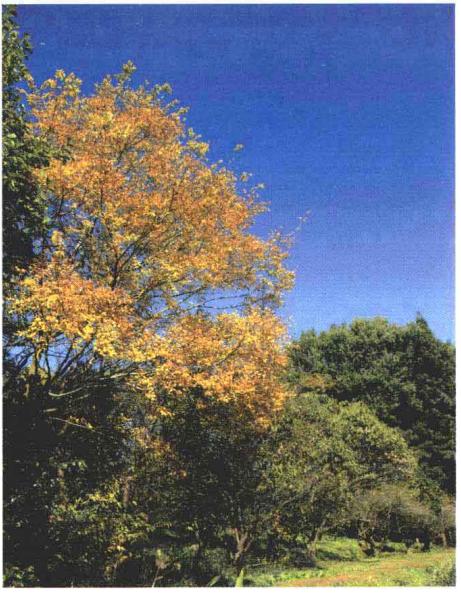
身近な自然が解き放つユニークな発想と生きる喜びは、その気になれば誰でも享受し、手を取り合って輪舞することができる

——序章　生命と叡智の起源

——第三章　ちいさな揺りかごのつくり方

——第四章　豊穣の聖域「王家の谷」へ

——第五章　ツボをこさえて幾千万年



目

次

序章 **生命と叡智の起源（オリジン）**
博物学者の観る夢／本書の特徴／本書が羽化するまで（謝辞）

第一章 **本能の美しき迷宮**——ジガバチ
逆立ちする自然／庭の盗賊／ハチと博物学者の輪舞／似我蜂の呪文／
偶然の足音／穴を掘ります／巣穴をのぞくちいさな眼／
地下の「子ども部屋」／ハチの戸締まり／灼熱の三時間半／麻酔医の手際／
麻酔は、やっぱり難しい？／中枢神経の非破壊手術／
「サイン（兆候）」の正体／意地悪な「すり替え」実験／
じゃまをするジガバチ？／美しきジェリービーンズ／
わずか5ミリのヒットエンドラン／ジガバチに関するいくつかの酔狂／
「本能」の科学／本能の悲劇／自分以外の本能／進化論とファーブル／

第二章 **夏の夜のシルクロード**——ヤママユ
ヤママユの夜／ヤママユ大国、ニッポン！／森のダイヤモンド／

雑木林は「迷宮」でありまして――／物静かな原石たち／無謀な賭け／ダイヤモンドの製造法／自然界のトリック／行動もトリッキー／夢見ごこちの交尾／新時代の幕開け／

第三章 **ちいさな揺りかごのつくり方**――オトシブミ 137

優雅な仕事人／もっとも「珍奇」な種族／その名も「丁切」／死んだふり／古代の秘術／黒い小兵の発卦よい／生命の揺りかご／オトシブミ／ダイナミックでエレガント／尻をかく「オス」／オレンジの宝石／驚異のバイオ・ファーマー／そよ風を子守唄に／

第四章 **豊穣（ほうじょう）の聖域「王家の谷」へ**――センチコガネ 189

ふんころがし／でんぐり名人／うんこスペシャリスト／「うんこ」。なにするものぞ／センチコガネ（雪隠黄金）／臆病なパン職人／トンネル屋の仕事場／不思議な巣穴／異常気象と里山の恵み／キノコ栽培家／フンコロガシのフン／フンコロガシのペット／深遠なる穴／

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第五章　**ツボをこさえて幾千万年**——トックリバチ
夢観る季節／ツボは世界の標準規格／季節のツボ／ファーブルのツボ／日本のトックリバチたち／ドロ遊びの文明／コテさばきの妙技／工房のトライアングル地帯／生命の様式美／狩人の腕前／恐ろしくへたくそな処置／アクロバット人生／愛のツボ／
参考文献・参考図鑑・取材協力ほか　280
索引　286

序章

生命と叡智の起原（オリジン）

博物学者の観る夢

むし。

この生き物は、よくご存じのとおり、その出所がまるでわからない。

それはもう元気に飛び跳ね、あなたの衣服にしがみつくあの連中は、およそ四億五千万年前、この青い惑星に忽然と現れ、陸の世界をすっかり支配してしまった。事実、いまでも、どこからともなくわいては、妖しげなむし屋を驚喜させ、清楚な淑女たちにスリッパでもってぺしゃんこにされている。それでも懲りない、あの面々。

いささかもの憶えの悪い、このちいさな生命体に関しての不思議は、驚くべきことに、ひとつひとつ列挙することは不可能である。途方もない分量となり、なおかつ、わたしたちを含めた「生命という存在と姿」について、とんでもない暗号、トリック、ありあまる情熱を秘めているからである。あのちいさな身体には、混沌をきわめた四億年分のエッセンスがぎゅっと詰まっているのだ。

その核心については本編でご案内することにして、ここでは、もっとも単純な疑問について触れておきたい。

こんなこと、思いつかなければいいのに、

「身近なところに、どんな生き物が暮らしているのだろう」

といった、ひどく子どもっぽい好奇心をそそられたものである。するとどうであろう。想

像もしていなかった、日本の自然界の、ものすごい姿が浮かび上がってきた。

とあるちいさなハーブ・ガーデン。ここは誇り高きガーデナーたちによって、有機栽培で守られた聖域である。いまや「生命（いのち）あふるる庭園」となり、植物から鳥類にいたるまで、自由闊達（かったつ）に輪舞し、それは愉快な動態展示が楽しめるようになっている。

ここに、どんな生き物が暮らしているのか。

かつて調べられたことがないことを知り、鼻息もあらく、嬉々（きき）として研究をはじめた。

もれなく腰がくだけ、後悔のあまり、目まいをおぼえた。

チョウ・ガの仲間だけでも八十七種、である。

ハチの仲間は六十三種。

カメムシの仲間、四十八種。

甲虫の仲間、七十七種――。

いわゆる昆虫と呼ばれる種族だけで、軽く三百種を超えた（クモは三十六種。このほか、調べがつかないものが五十種超）。いずれも一ミリ以上の大物たちで、それ以下の生命となれば、算段の手はずもない。

「庭園」といえども、規模はちいさい。外周を歩けば十分とかからない。調べながら歩いたところ、五年もかかった。いまなお、道なかば、である。

もっとも魅力的で神秘的なことは、海外の植物を植えているのに、はじめて顔を合わせ

るむしと植物は、なかなかうまくやっている。
「生き物によっては、土着の雑草たちを頼りに生きている連中も多いはずだ」
といった考えが、運悪く、脳裏を掠めた。
さて、雑草たちは、どれだけの種類が生え、わたしにむしられているのか。
絶滅危惧種を含め、六十五種も数えさせられたものである。

日本においては、ほんのちいさな世界にも、これほど多くの生命を宿し、育む力がある。
流行りの「生物多様性」といえば聞こえはいい。けれども、あのちび助たちにとって、ここで暮らし、生きることは、決して楽ではないだろう。ささやかな人生を、愉快に満喫するためにする創意工夫は、大変なものになり、こともあろうに、その神秘をまんまと堪能しようともくろんだのが本書である。

むしは、刻々とその姿を変える迷宮——千変万化窮まりなしの自然界を、誰にとっても、ごく手軽に、わかりやすく案内してくれる名ガイドであると、わたしは考えている。
「いまさら調べる必要は、もうない」といったふつうのむしでも、新しい発見と感動をいくらでも運んでくれる。
「そんなこと、やるだけムダ」と他人が嘲笑する事柄は、決まっておもしろい。そこで得た経験は、多くの人が決して得ようとしなかった喜びに満ち満ちている。

たとえば、進化という、遠大な奔流（ほんりゅう）のなかで、わたしたちが決して得ることができなかった特権を、昆虫たちはもっている。大空をのん気に旅するシステム、とても器用な建築技術、豊かな自然を観察する才能は、まったくもってうらやましいほど。

ところが、狩りをする獰猛（どうもう）な連中も、器用さを売りにしている種族も、たまにとんでもない間違いや失敗をしでかす。その理由のほとんどが、まったくわからないという事実が、理性的な研究者をひどく悩ませている。むしたちは、十分に対応できるシステムをもっている。なのに、こちらが想像もしなかったドタバタ劇を、惜しみなく披露してくれる。ときには、命がけで。

失敗と、それを克服するアイデア。

それぞれの生き物に贈られた、独創的な才能――「そのものらしさ」は、ここに凝縮されているように、わたしには思える。

むしという、身近な小動物の暮らしをのぞいてみることで、わたしたちが住んでいる世界の姿、それどころか、わたしたちの内面に秘められたままの未知の可能性を、興奮や感動とともに目覚めさせてくれる。

多くの博物学者をはじめ、古代の自然哲学者が追い求めていた夢とは、まさにこの点――目には見えない自分自身の可能性、生きる喜びの堪能――ではなかったか。

幸いなことに、昆虫をはじめ、身近な自然界が解き放つ、「ユニークな発想」と「生きる喜び」は、その気になれば誰でも享受（きょうじゅ）し、手を取りあって輪舞することができる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com